

梵文「大本経」写本 Cat.-No.498(=MAV 82, 83) に関する中間報告

吹 田 隆 道

先に公表した「大本経」第4章、5章の復元作業について、ゲッティンゲン大学の Siglinde Deitz 博士より校正箇所、及び疑問点を挙げた詳細な連絡をいただいた。それによる拙稿の訂正は出来るだけ早く発表したいと考えているが、その中で筆者の浅学により公表を知らずにいた Cat.-No. 498 (=MAV 82, 83) 写本の写真版が、左断片と右断片に分けられて別々の出版物に掲載されていることを知った。この写本断片については前校訂者 Waldschmidt 博士の解説に疑問を抱く部分があったので、取り急ぎ写真版との読み合わせを行った。まず前校訂者の解説文を見ると、

V.

- 1 /// [r]tā yad=utkrma[t=ku]... .. nibhas=ta... .. d=āsi(d)= ///
- 2 /// [ā]t=tato [s]ya śak[r]e(ṇa de)vendre(ṇa) cat(v)ār(o) de[v](a)pu(trā māt)ur=ā ///
- 3 /// [d=i]dam=u... .. (p)utrā sahi... .. turdi(śa)m [m]ahā ///
- 4 /// (sut)[i]kṣṇa[r]ū... .. [lam]bya [śa](kt)i(m) ///
- 5 /// ..p... .. ///
- 6-7 ///

R.

- 1-3 ///
- 4 /// .. m=[ena](m) ///
- 5 /// [t]ā khal[u] /// /// [ta]ḥ syam n[i]e... .. [loh]i[te] a[va] ///
- 6 /// iyam=atra[dh]... .. (a)[s]au vai[dū]r(yako) (ma)hāma[ṇ]i[h] pra[bh](ā) ///
- 7 /// [tra] dharmatā // dh[rmat](ā)... .. (vi)[p](a)[ś]y[i] bo[dh]i[s](atva)[s]=tu[ś]i ///

となっている。このローマナイズに従えば左断片（下線部分）と右断片の間に必要な欠損文字数が表面と裏面で大幅にくるってくるという矛盾があるのみでなく、R. 5, 及び R. 7 では他の写本に合わない伝承が生じてくる。

さてそこで、右断片を写真版から新たにローマナイズしてみる。この右断片はそれ自体が二つの断片からなっており、写真版では左右の部分が一行ずれて撮影されている。たぶんガラスプレート内で自然にずれたのであろう。以下にそれを修正し、現在用いられている表記に従って挙げる。

V.

- 1 /// .. m ///
- 2 /// +. [y](a)... n[i]bhas=ta++d=ā[sī] ///
- 3 /// vendre(ṇa)... .. de[v](a)pu(trā) [māt]ur=ā
- 4 /// (p)utrā sa[hi]++[t]urdi(śa)m [m]ahā
- 5 /// .. [i]kṣṇa[r]ū++... [lam]bya [śa] ///
- 6 /// pa ///
- 7 ///

(1行目が2行目になる可能性がある)

R.

- 1 ///
- 2 /// .. ///
- 3 /// .. [h] ku... ++... m=ena ///
- 4 /// .. ḥ syam n[i]... ++[lo]hi(te) ava
- 5 /// .. sau vai[dū]rya... ++[hā]ma[ṇ]i[h] prabhā
- 6 /// [vipa]sy[i] bodhi[sa](tva)s=tu[ś]i ///
- 7 /// (c)[ya]... +++[sau ku] ///

(2行目が1行目になる可能性がある)

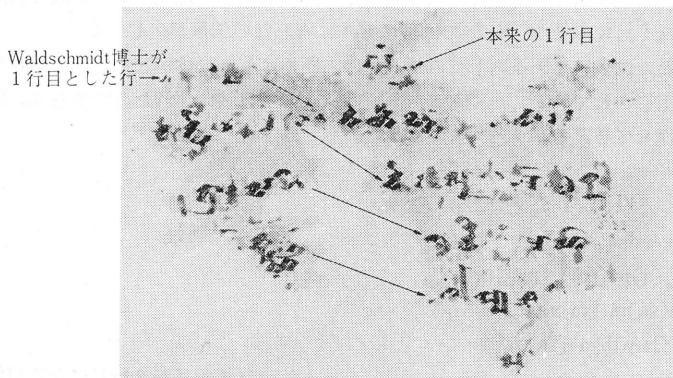
写本の読みに関しては前校訂者と大きな違いはないが、ここで注目しなければならないのは行数である。Waldschmidt 博士が一行目とした上に明らかにもう一行あったことを示す文字の一部が確認できるのである（次頁写真参照）。それに

対して左断片を見ると^④

V.	R.
1 ///tā (yad=u)[tkra]... ///	4 ///... ///
2 ///t=ta[t]o (sya) [śakr]e ///	5 ///[t]ā [kha]l[u] ///
3 ///... da[m=u] ///	6 ///i[yam=atra] ///
4 ///... ///	7 ///... ///

となる。この断片は磨滅がはげしく解読が難しいものの、Waldschmidt 博士の解読どうりの行数で確かに一行目の上は真っ直ぐに切れている。このように見るとこの左部分と右部分を同じ写本と考えることに疑問が生じてくる。前述のWaldschmidt 博士のローマナイズに生じた矛盾を考え合わせると、この右部分と左部分はそれぞれ別の写本の断片ではないかと考えられる。勿論、現状では写真版を使用している作業であり、写本の状態、字体、色、或いはそれが整理された状況等を考慮に入れられないのが残念であるが、それは今後 Dietz 博士の御協力を得ることとして、今回はこの断片が別の写本のものであれば、どのような結果になるか少し付け加えておきたい。

まず今まで右断片とされていたものに関しては行数以外の問題は無く今までと同じ個所に比定される。左断片についても V. については別の写本として同じ個所に比定されるべきであろうが、R. の該当すべき個所を考え直す必要がある。この写本を一応七行写本と考えると V. から R. までの欠損文字数はおよそ500文字前後であり、他の写本との異同が論じられていた5行目 ///[t]ā [kha]l[u] /// は 4e.1 の始まりの定型句に、6行目 ///i[yam=atra] /// はその散文の終わりの定型句に、他の写本との異同なく比定できよう。そして、7行目の ///[tra] dharmatā // dh[rmat](ā) /// は写真版での解読が難しいものの、確かにダンダが認められることから、後半を 4f.1 の導入部分の定型句とすると欠損文字数がある。しかし、前半を 4e.2 の韻文 d 句と決定する資料が他の写本に残っていない。ただ Cat.-No.685, 97, V, 3 に 4f.1 が始まるまえに m=ucyate // という不可解な記述があり、写本の欠損量から考えて 4e.2, d 句のあとに (tasmād ida)m ucyate // という書写ミスが有ったことを示している^⑤。これは言うまでもなく梵文「大本経」が散文を重頌に言い換えるときの定型句であり、その直前に iyam atra dharmatā があったからこそ起こる書写ミスと言える。したがって、4e.2, d 句は 4b.4, d 句に見る tathā tad āsīd iyam atra dharmatā か、或いは Saṅghabhedavastu によって想起される 4f.2, d 句の vipaśyīmātā iyam atra dharmatā のような句であったと思われる、ここでも以前の解読によって生じていた他本との異同がなくなる。



Cat.-No. 498, V (Sanskrit-handschriften aus den Turfanfunden Teil II より)

註① E. Waldshmidt: *Das Mahāvādānasūtra* Teil I, Berlin 1953, S.42.

② Ibid. p.42, footnote 8; 拙稿 “The Mahāvādānasūtra, A Reconstruction of Chapter IV & V,” 佛教大学大学院研究紀要 第13号, p.33, footnote 1, p.34, footnote 1.

③ E. Waldshmidt: *Sanskrihandchriften aus den Turfanfunden* Teil II, Wiesbaden 1968, Tafel 66.

④ E. Waldshmidt: *Faksimile-Wiedergaben von Sanskrihandchriften aus den Berliner Turfanfunden* I, *Handschriften zu fünf Sūtras des Dīrghāgama*, The Hague 1963, XCIIIc, XCIVa.

⑤ この部分を写真版で確認するのは困難である。ここでは一応 Waldschmidt 博士の解読に従った。

⑥ 前掲拙稿 p.35, footnote 2.

⑦ 前掲拙稿 p.29.

⑧ 前掲拙稿 p.37, 尚, Saṅghabhedavastu との関連に関しては、拙稿 “梵文「大本経」の復元に関する若干の問題” 『印度学仏教学研究』第33巻, 第2号, p.548 参照。